

総合デザインセンターでは県内企業35社からなる「富山県商品開発研究会」を組織し、デザイン情報の提供をはじめ、商品開発や企業間の交流を推進しています。本年度1回目のテーマは、世界最大規模の国際家具見本市「ミラノサローネ」のデザイントレンド報告。30数年間にわたり同サローネの視察・取材を続けてきた富山県総合デザインセンター所長・桐山登士樹による報告とトレンド分析が行われました。

ミラノサローネ2025デザイントレンド報告

01 2025年の概要

今年で63回目を迎える国際家具見本市ミラノサローネ。1985年からこの見本市の取材を始め、今回で38回目になる。今年のミラノサローネは、従来の「家具見本市」と「Euroluce（エウロルーチェ）」と呼ばれる照明に特化した見本市、このふたつが行われた。来場者数は全世界から302,548人。イタリア以外からの来場者は68%。うち中国からが6.5%で最も多い。コロナの影響を脱し来場者数は復活している。ロシアも3%となっている。ポーランドやルーマニアなど、これから産業が伸びるだろう国々からの来場者が伸びている。

広大な会場の中で、私が主に見るのはハイセンスなブランドが並ぶホール22・24、そしてサローネサテリテと呼ばれる若いデザイナーが出店する場所だ。サテリテには35歳以下のデザイナー700人と20の国際的なデザイン学校が出展。日本からは30名が参加しており、その数は国際的にもとても多い。今年のテーマは「Thought for Humans.人間のための思考」。コロナ以降、戦争などの混乱が続く中で、デザインの原点に立ち返り、その主要な表現と次元が人間によって、人間のために作られるものであることを思い出させるメッセージだ。会場にはゴミ分別用の組み立て式紙製ボックスが設置されていた。今世紀は「紙」の時代なのかもしれない。

02 Kartell カルテル

毎年、50社ほどのブランドを定点観測しているが、その中で見落とせないもののひとつがKartellだ。プラスチックを扱うKartellの展示のひとつが、AIによってデザインされた椅子だった。デザイナーがAIを使う、あるいはAIをメンターする、そんな新しい時代の片りんを感じた。ブランドなり企業のデザインの意図を伝えることで、デザインが生成され、それが製品として販売されていくという初めての事例である。時代の変わり目を強く感じた展示だった。

また、自動車メーカーFIATとのコラボで製作したモデルカーのベースとなった車両は、ジウジアーロがデザインした

PANDAだった。

主要製品である家具の素材では、かねてより再生プラスチックなどサステナブルに配慮した素材でトライアルしていたが、かつてのプラスチックだけの製品づくりは陰をひそめ、色使いや造形面において情緒感豊かな洗練されたものづくりをしていた。

昨年度Kartellはロンドンの百貨店リバティーとコラボし、リバティーカラーのソファや椅子をつくっていたが、その延長であろうか、折り畳み式のソファの展示を行っていた。かつてはプラスチックオンリーの製品づくりをしていたメーカーが、コラボやアライアンスによって新しい素材や事業領域に挑んでいる。これからの時代は、このような柔軟性とスピード感ある変化が重要になるだろう。

03 edra エドラ

Kartellと対比して見られるのがedraだ。昨年もそうだったが顧客との関係づくりを見直している。自分たちのブランドを愛してくれる顧客を大事に囲い込むこと。そしてこれまでは中国など各国で行っていた製品づくりを、コロナを契機に100%イタリア製とし、職人の技を活かしedraのこだわりがディテールに反映されたものづくりをすること。これらによって売上げが上がり、会社の経営体質も大きく変わってきた。

04 moooi モーイ

オランダのmoooiは、マルセル・ワンダースがクリエイティブディレクションを行っており、私もこのブランドの世界観に魅せられていたひとりだ。かつてはミラノの市街地で展示会を行っており、そのころはワンダースの特色が色濃く出ていたが、近年ではマスを意識したものづくりを志向しているためか、ワンダースの影は少し薄くなっているように感じる。しかし他社にはない非常に特色あるものづくりなので高いブランドイメージを有している。花びらのような椅子、星のような照明器具など新しいデザイン、テイストを打ち出しているブランド

だ。そのmoooiがミラノ中央駅からドウオーモに向かうメインストリートに面した一角に直営店を出した。かつての特色は薄れショップ然とした店内には、中国人をはじめとするアジア人が多く来訪していた。アジアの富裕層には人気があるブランドだと理解できるが、もう少し伸びやかなブランドであってほしいなと思う。

05 Gandia Blasco ガンディア ブラスコ

初めて目にしたスペインのブランドだが、隈研吾氏の表記で目に留まった。リサイクルのペット繊維を手工芸で製品化したものだ。「隈氏の協力を得て、環境とハンドクラフトをテーマにもつくりを行っている」とディスプレイに表記してあった。ニューヨークに在住の田村奈央デザインのソファも出していた。ヨーロッパの富裕層は自宅の庭に家具を置くなどするが、そのようなニーズに応えるブランドのようだ。最近、日本のアトリエ系建築家が手がけるプロジェクトに「別荘」が多いが、自分の家と異なるテイストで演出する別荘などのリゾートライフに向けた製品を事業化しているブランドだ。

06 YOY ヨイ

東京を拠点に活動するYOYの展示「SNOW by YOY」は雪の結晶に着目したもので、雪の質感を再現した素材をフラワーベースなどに展開していた。自分たちがどこに着眼し、それをどのように分析し変化変容させていくのかという物語は大切である。何に着眼するのか、そのセンスや感度はこれからの時代ますます重要になってくる。

07 Ambientec アンビエンテック

同ブランドは日本初のポータブル照明ブランド。LEDによって革新が進む分野だ。デザイナーの松山祥樹氏は三菱電機のインハウスデザイナーだが、このように自分自身の活動も行っている。吉添裕人氏や田村奈央氏も新製品を出している。Ambientecは、もともとは横浜にある水中照明の会社だったが、この10年で卓上照明の世界トップブランドに躍り出た。六本木AXISビルにもショールームをオープン予定だ。デザインセンターとしても、一度社長の久野義憲氏を招いてブランド戦略などについてお聞きできればと考えている。

08 FLOS フロス

私が最も注目しているのがFLOSだ。デザイナーとともにブランディングしているイノベティブな会社だ。デザインスタジオFormafantasmaが手がけたプロダクトは、シンプルで綺麗で繊細な、重々しさを感じさせない照明だ。一方でデザイ

ナーTobia Scarpaは、和紙をくしゃくしゃとさせたような照明を出していた。昔なら絶対にできないオーガニックなデザインだ。Michael Anastassiadesは非接触でも接続できるようなデザインを開発していた。Konstantin Grcicは90年代から活躍する私も会ったことのあるデザイナーで、デザインセンターのサロンにも彼の金属製の椅子がある。非常にしっかりと仕事をしている。フランス人Ronan Bouroullecはオブジェやアートピースを思わせる作品を作っていた。先述した作品たちもそうだが、機能オンリーのものからアーティスティックでエモーショナルなものにデザインのテイストは変わっていていると思う。FLOSほどの力があれば可能だと思うが、マスプロダクションにどの程度対応しているのかは疑問だ。こうした製品を一年間に何ピース作れるのだろうかとも思う。

09 サローネサテリテ・アワード2025

35歳以下の若いデザイナーが参加するサテリテの今年度のテーマは「NEW CRAFTSMANSHIP: A NEW WORLD」。グランプリを獲得したのは、東京を中心に活動するデザインスタジオSUPER RATの長澤一樹氏による「UTSUWA - JUHI SERIES」。棕櫚(シュロ)の樹皮を素材とし、伝統的な染色技法「柿渋染め」と、廃棄される鉄屑から抽出した「鉄媒染液」を掛け合わせることで、多様な形を可能にし、日本の伝統工芸の再解釈と環境への生産負荷の削減を目指したものだという。いま我々が取り組んでいるサーキュラーエコノミーとも共通するものがある。

2位は、オランダのスタジオ、ルイス・マリーによる「プリサード」。伝統的なブリーツ技法を再解釈した、接着剤を使わない自立可能な円形の間仕切り。テキスタイルの分野は、日本でもステンレスで編んだテキスタイルなど研究開発が進みさまざまに発展している。

3位はイタリアのリッカルド・トルドによる照明「フィル・ルージュ」。最大1,200ルーメンの明るさを発揮できるという。これからの照明は、「照明器具」としての存在感を消していく方向にあるのかなとも思った。

特別賞はスピーカー。ベネズエラ人デザイナー、ファン・コルティゾの「Quibor Project」で、存在感のある生物的な外観は伝統工芸の新たな言語の可能性を感じる、とされている。ある意味、今までにない奇抜な存在感を放っているが、スピーカーとしての機能はどうなのかと考えてしまう。

10 日本からの参加者

日本からは30人(組)のデザイナーが参加していた。

富山デザインコンペティション2020でグランプリを受賞した「積彩」の作者・大日方伸氏も出展。コンペ当時は慶応大学の研究生だったが、今は起業し事業も軌道に乗っているよう

だ。3Dプリンタの可能性を追い込む、というテーマに一貫して取り組んでいる。

岩松直明氏は和紙を使った照明器具を出展。神戸に拠点を置くKT&FSは椅子を出展、彼らは椅子の座面と構造部の接合について様々な試行錯誤をしており、先達とは違うアプローチで椅子に挑んでいる。

進藤篤氏も県総合デザインセンターとなじみのあるデザイナーのひとりで、照明器具を出展していた。彼は鹿島建設のインテリア業務を担う(株)イリヤに在籍。11月から富山県美術館で行うデザイン展にも出展予定だ。

増田純一郎氏は和紙を使った照明器具を出展していた。有機的なデザインが良かった。

古井翔真氏は2022年のデザインコンペにおいて、作品「雲」でグランプリを受賞した人物。他にも数多くの日本人デザイナーに会うことができた。



上から 大日方伸氏、増田純一郎氏、古井翔真氏

ミラノ市内の美術館やギャラリー、大学、歴史的建築物、事務所スペースなど約1,500か所を会場として行われるフォーリサローネについて紹介する。その中でもメジャーな場所として「Brera プレラ地区」「Centro チェントロ(市内中心部)」などがある。

プレラ地区にあるTime & Styleは、吉田兄弟が展開する家具ブランドで、東京にもショールームを持ち工房は旭川にある。ミラノの一等地であるプレラ地区にフラッグシップショールームを設けている。美術工芸品のように家具をショーケースに入れて展示をしていた。

ほかにプレラ地区で活躍している日本人として、ドリルデザインの林裕輔氏、北川大輔氏、大城健作氏がいる。これからのデザイン界で注目すべき人たちだ。

カドルナ駅近くにあるリッタ宮では、韓国の建築家による展示が行われていた。鑄造に使う砂を敷き詰めたステージで、舞踏家が踊りを披露していた。

京都のHOSOOは、イタリアのデザインデュオDIMORESTUDIOとのコラボレーションによる新作テキスタイルコレクションHemispheresの発表を、ミラノ在住のアーティスト、オザンナ・ヴィスコンティのアトリオで行っていた。オーセンティックな嗜好を持つ人たちのテイストにマッチするテキスタイルとなっている。HOSOOはすでにプレラ地区にショールームを持っているが、今年はそこから一歩踏み出し、地元のアーティストと新たな関係性を作る活動を行っている。



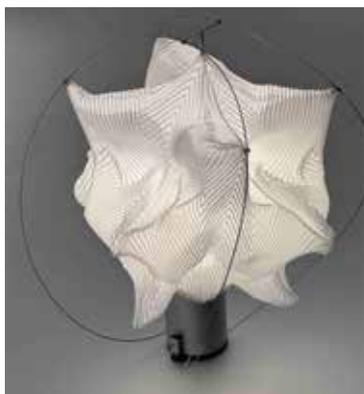
高岡市の(株)平和合金は、デザインスタジオwe+と一緒に花瓶コレクション「Unseen Objects」を発表していた。鑄物文化再発見をテーマにした作品だ。自分たちのブランドを世界に向けて発信していくことは大事なことで、これからの活躍に注目したい。

プレラ地区で注目したのはLOEWEの「急須コレクション」。パトリシア・ウルキオラや深沢直人氏がデザインした急須が展示されていた。他にもB&B ITALIA、Cassina、石のような樹脂の作品を展示していたMAGIS、Cappellini、藤の作品を出していたFLEXFORM、LOUIS VUITTON、Hermès、ハンドクラフト的要素が色濃い竹を使った作品を展示していたGUCCI、Saint Laurentなどのブランドが目をつけた。

同じくブレラ地区にある歴史的建造物パラッツォ・ランドリアーニでは、吉岡徳仁によるグランドセイコーのインスタレーション「Frozen」の展示が行われていた。氷のソファが展示されていたが、次第に氷が解け変化していくところに時の流れを感じさせる表現になっていたように思う。



イッセイミヤケはatelier oiとのコラボで照明器具「TYPE-XIII Atelier Oi project」を発表。新しい照明器具の在り方を模索していた。会場には、布がドライヤーの熱でどのように変形するかを体験できるコーナーも設けられており「見せて終わり」ではなく体験を通じて素材の理解を促す試みもなされていた。LEDの登場によって照明器具にはさまざまなデザインが可能となりつつある。



LEXUSはトルトーナ地区のスタジオで、インスタレーション『A-Un』と、クリエイター3組によるインタラクティブ作品「Discover Together」を展示していた。これらを通じて車と移動時間、AI化されつつある車と人間の五感との関係の見直しや、将来的な宇宙ビジネスへの展望などを伝えようとしていた。



初出展を果たした福井県の公園遊具などのメーカー(株)ジャクエツは、深沢直人氏とともに手掛けたプロダクト「YUUGU」を公園に展示していた。富山県美術館には佐藤卓氏デザインによる同社のプロダクトがあるが、今回は深沢氏のデザインで展開していた。

同じく初出展となる名古屋で建築設計およびインテリア小売店舗経営を行っているREAL Styleは、川上元美デザインの新作プロダクトを中心に、山翠舎、suzusan、川島織物のアイテムによる日本ブランドをテーマにした展示が行われていた。

そのほか目に留まったのは、石川県出身の出村光世による眠りをテーマにした「ZZZN SLEEP APPAREL SYSTEM」、加藤大直が出展していたのは3Dプリンタによる様々な家具や照明。3Dプリンタの登場によって、プリンタがあれば設置する現地で家具の製造が可能となり、物流コストが不要になる時代が来るかもしれない。

12 まとめ

今回のさまざまな展示を見ていて感じたのは、AIの存在が色濃く反映されていることである。各社がAIを分析やものづくりに活用し、AIが新たな感性領域に入り込みつつあるということだった。また、これまでのマスプロダクションからアートピースをつくるようなものづくりへ、(伝統)工芸の世界をもものづくりに取り込んでいこうというメッセージを読み取ることができる。アーティストの個性、作家性が重要になってくるだろう。

アップサイクルやサーキュラーエコノミーがもっと打ち出されてくると考えていたが、もはやそれらは当たり前のこととなっている。わざわざ言挙げするものではなく、後で説明すれば「そうだったのか」と理解できる、そのようなものとなっている。「気が付けばすべてアップサイクルだった」という時代が来ているように思える。

素材については実に多様。コロナの世界的流行を契機にどの会社も端正でしっかりしたものづくりにシフトしているし、「made in Italy」のように自国のリソースで再構築していく傾向にある。いい意味での民族性や文化性が出る時代が来ているように思える。かつてのようなある形や色、デザイナーが「標準」となるような時代は終わり、多様性の中で自分たちの表現を行っていくことになる。その表現の対象は、マスなのか特定の人たちなのかという違いはあるにしても、自信をもってものづくりを打ち出していくことへのハードルやバリアは無くなったと思う。

富山からは(株)平和合金が参加されていたが、これからはもっと多くの企業や人がミラノに挑んでいただきたい。多くのことが新たなフェーズに移行しつつある、そんなことを感じたミラノデザインウィークだった。